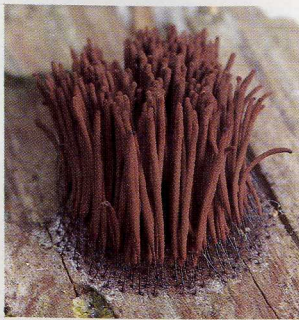


PHOTO ESSAY -27-

東広島キャンパスの植物



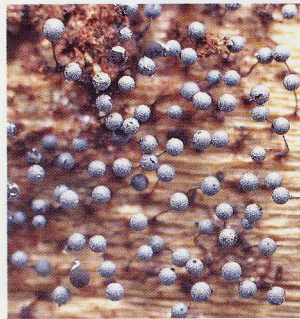
サビムラサキホコリ。
子実体の高さ約1cm。



ススホコリ。
子実体の直径約2.5cm。



マンジュウドロホコリ。
子実体の直径約3.5cm。



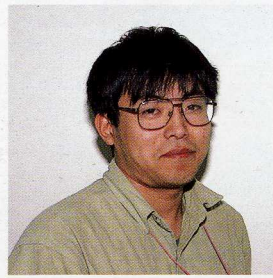
ツヤエリホコリ。
孢子囊の直径約0.5mm。



サカズキホコリ。
子実体の高さ約1mm。



黄色く扇状に広がり
血管状の脈をもつ変形体。



写真

松本 淳

Matsumoto, Jun

(理学研究科生物科学専攻博士課程後期3年)

変形菌類

Myxomycetes

公園や登山道では、側溝に溜まった落ち葉や放置された倒木をよく見かける。変形菌類はこのような所に生育している。他の菌類と同様に、変形菌類も小さなキノコのような子実体の中に孢子を形成し、これを飛散させることで増殖する。しかし、他の菌類とは違って、孢子が発芽すると小さなアメーバ状細胞が生まれる。アメーバ状細胞は細菌などを食べて分裂により増殖する。このアメーバ状細胞は精子や卵に相当し、やがてアメーバ状細胞同士で合体して、もう少し大きなアメーバ状の変形体となる。変形体も非常にゆっくり回り回って、細菌など微小な生物を捕食し、今度は分裂はせずに単細胞のまま大きくなっていく。その後条件が整うと、光を求めて落葉上や倒木上に這い出して子実体を形成する。子実体は種ごとに色・形・大きさが異なるので、分類の指標となっている。

変形体は土壌中や倒木中に潜んでいるため、人目につくことは非常に少ない。人目につかない生活をしてきた変形菌類が大発生し、人々の前に現れた例がある。一九七三年の春、アメリカ合衆国の中央部と東部は例年になく大雨が続いた。そのために変形菌類の一種ススホコリが大発生した。ススホコリは日本にも普通に生育しており、その変形体はしばしば幅一拵程度にも広がる。さらに比較的発生場所を選ばないという特徴を持つ。この種の変形体が、特にグラスとマサチューセッツで大量に現れ、庭先や電信柱などそこいらじゅうに這い回った。しかし、このねばねばの正体が判る人はその地域にはいなかった。いつしか「他の惑星から地球侵略のため送り込まれた生物だ」という噂がたち、人々をパニックに陥れた。正体不明の巨大アメーバは確かに気味の悪いものだったであろう。

ところが、メキシコのベラクルスのある地域では、ススホコリやマンジュウドロホコリの若い子実体を「caca de luna (月の糞)」と呼び、焼いて食べているようだ。若い子実体は、外側は薄い膜で被われ、内部は孢子形成途中のいわゆる半生の状態で、ちよど卵の黄身のような状態である。栄養的にも蛋白質を多く含んでいる。筆者は変形体をなめてみたことがあるが、味にもおいもなく舌触りは粉っぽく、おいしいものではなかった。

東広島キャンパスでも多くの変形菌類が観察できる。大型のススホコリやマンジュウドロホコリも見つけることができるだろう(ただし、日本のものは毒の有無がわかっていないので、食べることはお勧めしない)。慣れてくれば、公園の植木や道路脇の側溝に溜まった落ち葉など、いたるところでさまざまな色や形のものに出会うことができる。特異な生活史を持ち、あまり人目につかない変形菌類も、実際はごくありふれた生物なのである。